

てん菜種子の登熟に関する研究

第2報 登熟中の降雨が穂発芽並びに子実収量に及ぼす影響

安部秀雄・村井修・山本保

てん菜の開花後期より収穫期までの人工降雨が、穂発芽及び子実収量に与える影響を調査するために1962年と1963年にガラス室を使用して試験を行った、その結果の概要は次のとおりである。

1. 人工降雨処理を6月中下旬より7月中旬まで行った区の穂発芽比率は96%と10.6%であった。15日間処理は14.9%と穂発芽比率は高く8日処理は4.0%と低下した。そして穂発芽は7月上旬より始まり、且つ7月上旬の降雨処理が穂発芽に及ぼす影響は大であった。
2. 人工降雨処理が子実収量に与える影響は6月中下旬より降雨処理を行った区が大であり、無降雨区に比較して12.3%~8.1%の収量で著しく劣り、7月上旬の降雨処理は子実収量に与える影響が少なかった。
3. 収穫した子実の発芽歩合は、早く人工降雨処理を行った区が低く、夫々の発芽歩合は8.0~8.5%であり、無降雨区が85.5%と発芽歩合が高いのに比し著しく劣ることが判明した。